

令和6年度 「学校関係者評価」

	項目 (重点としたものに○)	自己評価 (学校の目標達成状況及び学校の取組の適切さ、改善方策について等)	外部評価者からの意見・指摘
教育環境の充実	①学校安全の推進	校舎・敷地内の安全対策では、PTAや地域のボランティアの方の協力により、側溝清掃や樹木の伐採など環境整備を定期的に行ってもらった。また、登下校の見守りも交通指導員や地域の見守りボランティア、また保護者の方をお願いしている。	・小坪小ならではの「海と資源」の活用は大切な学習の柱である ・地域住民、団体等との協力支援による諸活動の成果が掲示物などの児童作品の中に良くあらわされている
	②教育情報化の推進	全てのクラスで学習内容に応じ学習用端末(chromebook)の活用を積極的に行うことができた。また、学級閉鎖時には、端末を持ち帰り、担任との会話や自宅学習のツールとして活用した。各家庭との連絡では「まち comi」の他、「まなびポケット」の有効活用が図れた。	・校内の環境整備は随分整ってきた。つぎの課題は、廊下、準備室内の整理整頓、角スペースの安全性の推進であろう
	③地域との協働推進	コミュニティスクール(CS)の立ち上げに向け、住民自治協議会や青少年健全育成推進会等で説明を行ったり、CSの委員の候補の方と打ち合わせを数回行ったりできた。年度内にPTAや地域の行事の精選・役割分担についての熟議を実施する予定である。また、小坪のフィールドを活かした授業を、漁協や地域の福祉施設等と積極的に協働し取り組んだ。また、地域の方を講師として多く招いた。	・児童からの挨拶指導をもっとお願いしたい ・地域への説明が良くされていて不安なく変化に対応できた ・「常にどうあったら・・・」との問いをもって子どもたちが授業に臨んでいたのが良い
	④学校評価を生かした学校づくり	「学校づくりアンケート(学校評価アンケート)」を前期と後期の2回実施した。対象は、1～6年生の各クラス別と、保護者で、前期の結果を分析し、教職員及び保護者・地域に公開し意見を求めた。特に、評価が低かった項目や、気になった項目については、重点的に取り組み、後期のアンケートでは改善が見られたものもあった。	・PTA、ボランティアも人数が集まらず限界がある。学校安全のために市にもっと予算増額などを掛け合っていたきたい ・タブレットをさらに活用し力をつけてほしい
一 学習指導の充実	①授業改善の推進	今年度の校内研究では、教科指導・学級づくりの原点に立ち戻り、「授業を通した学びの集団づくりをめざして」というテーマで研究を推進した。研究では1次支援に重点を置き、「楽しく・わかる」授業を行うことでいじめや不登校を生まない集団(学級)づくりをめざした。また、学年だけでなく学校全体で支え合ったことで、学級崩壊や目立たいじめはなかった。また、不登校児童の発生率も昨年度と比べ大幅に減少した。研究では小学校の実践が豊富な専門の講師から多くのアドバイスをいただき、授業改善に取り入れた。	・児童はゆったりと落ち着いた雰囲気の中で、自らが率先して活動に取り組んでいた ・授業改善が集団づくりに結びついているのが素晴らしい。落ち着いた授業風景にも成果が表れている ・地域の特性を生かした体験活動が行われていることがとても良い
	②健康体力づくりの推進	日常の体育の他、学年を縦割りにした全校リレー大会や縄跳び大会を実施した。また、今年度は、「ラジオ体操 Day」として登校時間前の15分間、任意参加の児童と教職員でラジオ体操を実施する日を設け、児童の体力向上と運動習慣の定着を図ることができた。さらに、養護教諭や栄養士による健康教育も実施した。	・分かりやすい授業によって子どもたち同士の間で「理解できた」ことが共有されていた ・日々の生活の中で、基礎体力の充実に努められたい

	<p>③体験活動の充実</p>	<p>小坪の地域性を生かした「わかめの種付け」や「アオリイカの産卵床の設置」、「ビーチコーミング」など漁港や海をテーマにした体験活動を多く実施できた。また、校外活動も積極的に実施し、市役所やスーパーの見学、博物館や史跡巡り等を実施した。さらに、市内で活躍する音楽家や美術館の職員を招き、芸術体験にも力を注いだ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・不登校の理由が「いじめ」でないものが出てきている。学校でしか出来ない勉強以外の体験がある授業を多くしていただきたい ・人手が少ないのを逆に生かして保護者ボランティアなどを活用し、子どもたちの良い経験となる取り組みがもっと増えるとよい
	<p>④今日的課題への取り組み</p>	<p>特に、環境教育に意欲的に取り組んだ。地域の活動家を多く招き、磯焼けや、マイクロプラスチックなどの害から海の環境を守る活動に携わったり、カーボンニュートラルについても学んだりできた。さらに、SDGsの根幹となるダイバーシティを意識し、社会福祉協議会の協力により、障害者スポーツの体験、高齢者とのふれあいなどの福祉体験などにも取り組んだ。</p>	
<p>ロ 支援の充実</p>	<p>①支援環境の充実</p>	<p>どの担任も教室内の掲示物のレイアウトを工夫している。例えば、支援の必要な児童が授業に集中できるよう教室前面（黒板も含め）にはその授業に必要な最小限の掲示物を貼り、後方にこれまでの活動の歩みを書いた模造紙や図工等の作品を掲示するなどである。また、研修時間（S時間）の教員にはできるだけ校内を巡回してもらい支援が必要なクラス・児童の対応に当たってもらった。また、教育相談コーディネーターを複数配置したことで支援の必要な児童をいち早く見つけ、情報連携を迅速に行うことで、きめ細やかな手立てを講じることができた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・支援の充実が図られ、各職員が安心して授業を行っている姿が見られた ・教室環境が整い、支援の必要な子どもたちが落ち着いて生活できている。 ・教育相談コーディネーターの複数配置が効果的であると感じた ・「こもれび」ルームのインテリアが素敵で、居心地がよさそうで安心感をもてた ・授業中に立ち歩きする児童がほぼ見受けられなくなった ・全職員がいじめ対策は「重要課題」として捉えており、職員間での共有がしっかりとされている。今後も細やかな対応をお願いしたい。 ・幼児期からの子どもの成長過程を知ることで家庭環境もある程度知ることができるので、それを踏まえて指導していくことは重要と思う ・年2回のアンケートが効果的に活用されている。 ・久木中学校では久木小学校の6年生を1月に招いて見学
	<p>②安心できる居場所づくりと絆づくりの推進</p>	<p>今年度、教頭が主体となって整備を進め、地域の方の協力もあり、支援教室（リソースルーム）「こもれび」が完成した。「こもれび」は教室や学校の雰囲気を感じさせない空間にするため、ソファやハンモック、流木や水槽を配置した。不登校児童が安心して過ごせる場所となっている。絆づくりでは、今年度巡回スクールカウンセラー（SC）を講師に職員研修を実施し、事例やワークを通して具体的な手法について学んだ。</p>	
	<p>③いじめ対策の推進</p>	<p>年度始めのいじめ防止研修会で見直した「いじめ防止基本方針」を各職員間で周知の徹底を図った。また今年度の校内研究は、「授業を通じた集団づくり」をテーマに進め、「いじめ」を生まない集団づくり、すなわち1次支援に重点を置いた。さらに、教育相談コーディネーター（Co）を複数配置し、Co 同士の情報連携を密にすること、担任とCo や養護教諭、管理職との迅速な連携を行うことで早期発見にも努めた。そのため、事案の深刻化を防ぐことができた。また、巡回SCの担任へのフィードバックの時間を確保することも早期発見・早期対応に繋がった。</p>	

	<p>③不登校対策・問題行動対策の推進</p>	<p>引き続き、担任や Co が定期的に家庭訪問をし、不登校児童やその保護者と直接コミュニケーションを取れる機会を多くもつようにした。また、リソースルーム「こもれび」の活用も登校支援の一つとして周知・活用を図ることが出来た。日常では、研修時間（S 時間）の教員が校内を巡回し、学級経営が困難なクラス、問題行動児童への個別サポートに積極的に入ってもらった。</p>	<p>してもらった機会をつくったので小坪小学校でもそのような機会をつくったらどうか</p>
	<p>④幼・保・小、小・中の連携推進</p>	<p>昨年度までの校内研究を生かし、近隣の保育園との連携を行った。今年度は6年生が取り組んだ「海」をテーマにした活動を園児に伝えた。また、園児とふれ合う機会もつくり、保育園との連携を図った。しかし、中学校との連携は推進できていない。</p>	
<p>目 学校組織の充実</p>	<p>①学校・学年・学級経営の充実</p>	<p>暫く変更がない学校教育目標は、児童・保護者・地域に一定程度浸透していることから今年度も変更はしなかった。ただ、学校経営方針は「心の教育」に重点を置き、1次支援を鑑みた学年・学級経営を推進させた。学級目標の設定や取り組み方法については各担任に委ねているが、学級経営案の提出や期首面談等で考えを管理職が把握するようにしている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育目標で、今一番大切なのは「物」ではなく「心の教育」を重点に置かれているので安心感がある ・長時間労働問題の改善には PTA、地域の協力が必要である
	<p>②研究・研修の充実</p>	<p>校内研究会では、研究授業を行うクラスの授業を教員全員で見合い、その後の研究協議では活発な意見交換ができた。研究講師の助言も充実した内容で役に立った。また、夏季研修会や他校の研究会に積極的に参加する教職員も多かった。しかし、OJT は教員配置に余裕がなく、なかなか推進できなかった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「育てる」という視点から「支援」という方向性へシフトされていて、児童の自主性が養われている ・行事の精選、留守電機能の設置などで PTA や地域の理解が進んできている。今後はコミュニティスクールの実働化により教員の負担軽減化がさらに進んでいくだろう
	<p>③信頼に基づいた指導の推進</p>	<p>児童に対して実施した「いじめアンケート」や、前期と後期の2回、クラスごとに実施した「学校評価アンケート」の結果を踏まえ、指導の中で見過ごされているところや弱点を自己分析し、その後の指導に繋げるようにした。また、巡回指導員や教育指導教員とのフィードバックで指摘を受けた点について改善を図り、信頼に基づいた指導の推進を図ることができた。</p>	
	<p>④働き方改革の推進</p>	<p>従来スクールサポートスタッフに加え、新規に庶務補助員が配置されたことによって、今年度は職員の長時間労働や一人が抱える仕事量がかなり改善された。引き続き、会議時間の短縮化、行事の精選・効率化などによってさらなる働き方改革を推進していく。</p>	